

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K06684

研究課題名(和文) 富士山の山小屋にみる信仰を基盤とした山岳建築の近代化に関する研究

研究課題名(英文) The Modernization of Faith-based Mountain Architecture as Demonstrated in the Mountain Huts of Mt. Fuji

研究代表者

梅干野 成央 (Hoyano, Shigeo)

信州大学・学術研究院工学系・准教授

研究者番号：70377646

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本では古くから、山岳と深く結びつきながら文化が育まれてきた。本研究は、山岳のなかで育まれてきた建築の文化、すなわち「山岳建築」の歴史の体系的な理解を目指し、とりわけ山岳がもつ信仰の対象としての性格に着目して、信仰を基盤とした山岳建築の歴史を明らかにするものである。具体的には、日本を代表する山岳信仰の地である富士山を事例に、山小屋の開設過程を把握したとともに、山小屋の建築の原形および変容の方向性を把握し、これらを総合して信仰を基盤とした山岳建築の近代化の具体像を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、近世から近現代に至る連続的な時間軸のなかで、富士山の山岳建築に関する歴史的な文脈を捉えることができる。この研究成果とこれまでの研究蓄積(日本アルプスの山小屋建築に関する調査研究)との比較によって、信仰を基盤とした山岳建築の特性を示すことができ、日本山岳建築史の構築に向けての新たな知見を得ることができる。また、この研究成果は、世界文化遺産「富士山 信仰の対象と芸術の源泉」において、山小屋の修景・整備を検討する際の基礎的資料となり、富士山の文化的景観を継承していくための手がかりを提供することができる。

研究成果の概要(英文)：Japanese culture has nurtured a deep connection with mountains since ancient times. This research aims to gain a systematic understanding of the culture of architecture that emerged in mountainous areas, that is, the history of mountain architecture. In particular, by focusing on the nature of mountains as an object of worship, we seek to illuminate the history of faith-based mountain architecture. Specifically, we examine the case of Mt. Fuji as a model site for mountain worship in Japan. We explore the process by which the mountain huts (yamagoya) situated on Mt. Fuji developed, examining the original form of mountain hut architecture and the ways in which this form has changed over time. Finally, we combine our understanding of these aspects to gain a specific idea of the modernization of faith-based mountain architecture.

研究分野：建築史・意匠

キーワード：建築史 山岳建築 信仰 富士山 山小屋

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本では、山岳と深く関わるなかで文化が育まれてきた。とくに、明治期に近代登山(アルピニズム)が移入し、その後に広く普及すると、山岳にはより多くの人が入るようになった。山岳をこうした人々のいとなみの場としてとらえた場合、そこでは固有の建築文化が育まれてきたはずである。とはいえ、従来の建築史学の分野において、山岳のなかで育まれてきた建築文化、すなわち「山岳建築」の歴史は、体系的に把握されてこなかった。

こうした背景をふまえ、これまでに申請者は日本山岳建築史の構築を目指し、日本アルプスの山小屋建築に関する調査研究を進めてきた。日本アルプスは、日本における近代登山(アルピニズム)の普及において、その主要な舞台となった場所である。その登山道の沿道には、現在も多くの宿泊施設(山小屋)が営業を続けており、山岳建築としての歴史を伝えている。これらの成立に関する歴史的背景を紐解いた結果、近代登山の普及以前から山岳を生業の場としていた人々(杣人や猟師など)の小屋の土地と建物、および、それに関する経験的知識を礎として、近代登山の文化に対応した山小屋が建設されてきたことを明示した。

一方、山岳は生業の場としての性格のみならず、古くから信仰の場としての性格も有している。山岳が有する信仰の場としての性格は日本の山岳文化を理解する上でも重要な観点であり、また、そこにたつ山岳建築に関する調査研究は、日本山岳建築史の構築においても重要な位置にあるだろう。信仰の対象としての宗教施設と宿泊施設(山小屋)は、元来どのような関係であり、近代登山の影響を受けて宿泊施設(山小屋)はどのように変容し、現在へと受け継がれているのか。その過程を読みとることで、信仰を基盤とした山岳建築の近代化の具体像を把握することができる。

### 2. 研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究は、日本を代表する山岳信仰の地である富士山を事例に、信仰を基盤とした山岳建築の近代化の具体像を明らかにするものである。具体的には、富士山の登山道の沿道に位置する宿泊施設(山小屋:写真1・2)を対象として、<山小屋の開設過程>と<山小屋の原形と変容の方向性>の解明に取り組む。

<山小屋の開設過程>では、史料調査をふまえて、宿泊施設(山小屋)が開設された歴史的背景を近世から近代への連続的な時間軸のなかで把握する。<山小屋の原形と変容の方向性>では、史料調査と実測調査をふまえて、宿泊施設(山小屋)が開設された当初の姿(原形)について復元的な考察を行うとともに、原形から現形に至る変化を把握する。

### 3. 研究の方法

富士山の山頂へと至る主要な登山道には、吉田口登山道、須走口登山道、御殿場口登山道、富士宮口登山道がある。これらの登山道の沿道に位置する宿泊施設(山小屋)を対象として、史料調査と実測調査を行い、これらの成果にもとづいて、<山小屋の開設過程>、<山小屋の原形と変容の方向性>の解明に取り組む。史料調査では、信仰関係史料や登山関係史料から宿泊施設(山小屋)に関する史料を発見・収集し、その一覧を作成したうえで、内容を分析する。実測調査では、歴史的な宿泊施設(山小屋)の建物について、建物の間取りや構造を記録するほか、部材にのこる痕跡や聞き取りなどをもとに、原形の復原と増改築の履歴を把握する。



写真1 吉田口登山道の山小屋



写真2 御殿場口登山道の山小屋(わらじ館)

### 4. 研究成果

#### (1) 山小屋の開設過程

富士山の山頂へと至る主要な登山道(吉田口登山道、須走口登山道、御殿場口登山道、富士宮口登山道)について、麓(北口本宮富士浅間神社、東口本宮富士浅間神社、新橋浅間神社、富士山本宮浅間大社)から山頂(久須志神社、富士山本宮浅間大社奥宮)まで続く登山道の沿道においてフィールドワークを行い、現存する山岳建築(跡地を含む)の位置や標高、現況を記録した。また、これをふまえて、文献資料(登山案内など)や絵図面、地形図を用い、江戸期、明治中期、明治後期、大正期、昭和前期、昭和中期の様子を復原した。これらの作業を地図上で整理し、山岳建築の分布を平面的に把握するとともに、これを時系列に沿って整理し、分布の変遷を把握した(図1)。また、把握した山岳建築を宗教施設と宿泊施設に分類し、その分布とその構成の変

化を観察した。その結果、各登山道における山岳建築の分布の構成として、[ 宗教施設と休泊施設からなる型 ] と [ 休泊施設だけからなる型 ] の二つの型を把握した。

[ 宗教施設と休泊施設からなる型 ] は、吉田口登山道と須走口登山道にあてはまる。宗教施設と休泊施設の混在は、とくに土地被覆や植生の変化と関連した山岳景観の境界（一目付近と五合目付近）において顕著であった。一目は、吉田口登山道では標高の低い草原地帯（草山）とその上方の森林地帯（木山）の境界にあたり、須走口登山道では森林地帯（木山）における高木帯と低木帯の境界である。五合目は吉田口登山道と須走口登山道とも森林地帯（木山）とその上方に広がる森林限界を超えた山域（焼山）との境界にあたる。また、こうした宗教施設と休泊施設の混在を特徴づけるように、昭和前期の一目には、宿泊機能を持った宗教施設を確認でき、信仰を基盤とした山岳建築の根本的な性格を読み取ることができる。吉田口登山道では宗教施設であったものが休泊施設へと用途変更がされる事例が、また、須走口登山道ではもともとあった宗教施設に加えて宿泊施設が建設される事例が確認された。両登山道とも、昭和前期には収容人数が大きく増加しており、とくに吉田口登山道では五合目と七合目で収容人数の増加が大きく、須走口登山道では六合目から八合五勺で収容人数の増加が大きく、とくにこれらの場所における休泊施設の大規模な増築の様子がうかがえる。

一方、[ 休泊施設だけからなる型 ] は、御殿場口登山道と富士宮口登山道にあてはまる。これらの登山道では、とくに、明治中期からの休泊施設の増加が顕著であり、御殿場口登山道は明治16（1883）年に、富士宮口登山道は明治32（1899）年に、現在の登山道が旧登山道に付け替えられた経緯がある。御殿場口登山道の前身である須山口登山道と、富士宮口登山道の前身である大宮口登山道について江戸期の絵図をみると、山岳景観の境界に宗教施設と休泊施設を確認できる。したがって、御殿場口登山道と富士宮口登山道も、その前身は[ 宗教施設と休泊施設からなる型 ] であったといえ、[ 休泊施設だけからなる型 ] は近代以降にここから分化した型であるといえる。御殿場口登山道と富士宮口登山道は、[ 休泊施設だけからなる型 ] へと移行した後も、麓に浅間神社があり、山頂に奥宮があるという、近世から続く麓と山頂の関係を変えずに各合目に宿泊施設が建設された。その後、両登山道とも、昭和前期までには各合目の間に休泊施設が建設された。また、この頃には、収容人数も大幅に増加しており、この時期に宿泊施設の増改築が行われたと推定される。

このように、富士山の登山道では、[ 宗教施設と休泊施設からなる型 ] と [ 休泊施設だけからなる型 ] がみられるものの、江戸期には[ 宗教施設と休泊施設からなる型 ] が支配的であり、宗教施設と休泊施設の混在は土地被覆や植生などの変化と関連した山岳景観の境界で顕著であった。この分布の構成は、後に近代化の過程において、[ 宗教施設と休泊施設からなる型 ] を踏襲するものと[ 休泊施設だけからなる型 ] へと分化した。[ 宗教施設と休泊施設からなる型 ] ではもともとあった宗教施設と関係しながら、[ 休泊施設だけからなる型 ] では麓と山頂の宗教施設の間に築かれた休泊施設を基盤として、昭和前期までにもっぱら宿泊施設の数を増やし、また建物に増築が加えられてきた。巨視的に捉えれば、より多くの登山者を受け入れる方向での宗教施設と休泊施設の接近的ないとなみとして理解することができるのである。

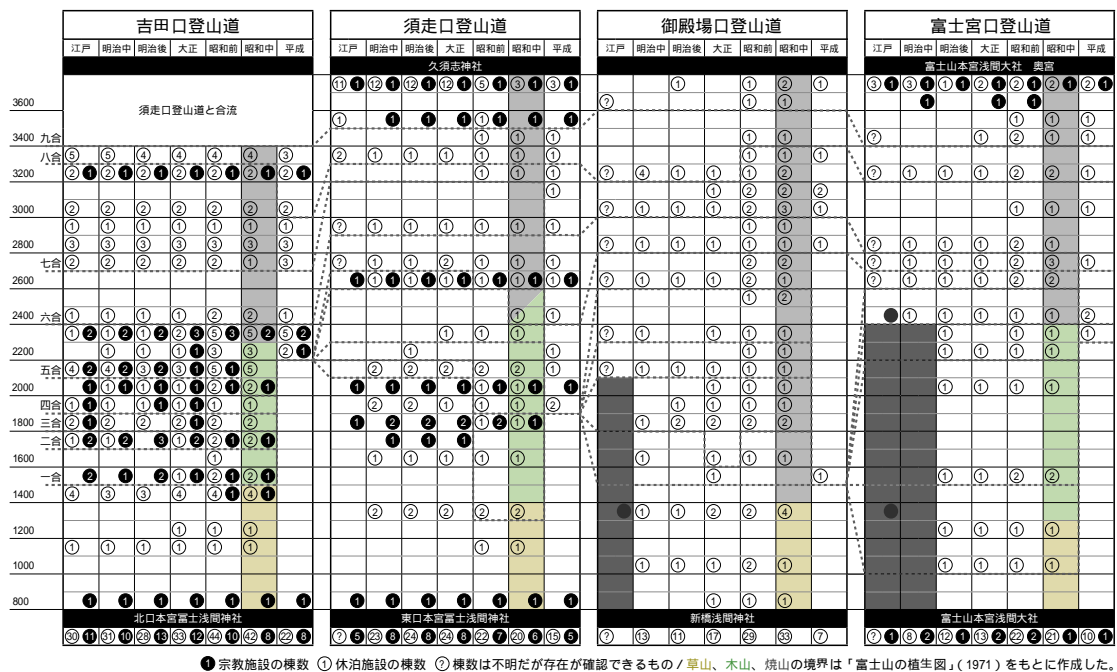


図1 富士山における山岳建築（宗教施設・休泊施設）の分布とその変遷

## (2) 山小屋の原形と変容の方向性

以上で把握した休泊施設（山小屋）の開設過程をふまえ、山小屋の建築がどのような姿を原形とし、その後どのように変容していったのか、その過程を把握した。特に、富士山の凡そ5合



目より上方の焼山では、木材を調達しにくい環境からか、はたまた厳しい自然環境からその身を守るためか、石材を多分に用いた石室と呼ばれる特徴的な山小屋がたつ。この石室に注目し、その原形と変容の方向性を把握した。一般に石室は、「岩石を利用し、または岩石でつくった部屋・小屋。岩屋。stone hut」(梅棹忠夫他監『日本語大辞典(第二版)』(講談社、1995年)116頁引用)と定義されているが、現在の富士山の石室は、その大部分が木造であり、この定義にあてはまらない。はたして富士山の石室は、どのような建築を原形とし、どのように変化してきたのか。各登山道で行ったフィールドワークに加えて、史料調査や建設年が古くにさかのぼる山小屋の実測調査を通じ、石室の建築について、その原形と変化の過程に関する解釈を行った。

フィールド調査より、富士山の山小屋、とくに焼山の範囲に分布する山小屋は石室と呼ばれながらも、現在はその大部分が木造でできていることを確認した。斜面を切土し、石積みで囲った平地に木造の骨組みをたて、その前面に石積みを組む形式が多い。フィールドワークでは、史料調査の成果もふまえて山小屋の建設年代についても推定を行った。このうち、なかでも建設が古くにさかのぼると推定される事例(御殿場口登山道「わらじ館」)について、実測調査を行った。実測調査を行った「わらじ館」は富士山の御殿場口登山道の7合4勺に位置する山小屋であり、下山時の砂走りに備えたわらじを販売していたことに由来する。建設年は定かでないが、登山案内に昭和7(1932)年時点の記録があるため、それ以前にはさかのぼる(今回の実測調査では建設年を昭和前期と推定した)。建物はム口(室)と呼ばれ、規模は梁間3間半、桁行8間半であり、前面は登山道に面して間口を広くとり、平入りとする。背面と両側面は地形を背負う。現在の間取りは、前面に向かって右側から、厨房、土間、客室を配し、客室には蚕棚の二段ベットを設ける。以前は前面に土間を配し、前面に向かって右側を土間(厨房含む)とし、左側を客室としていたという。屋根は4寸勾配であり、垂木に木の皮(杉皮か)を葺く。梁間15尺の上屋を組み(折置組)その上に和小屋組で屋根を組む。その両側に3尺巾の下屋を設ける。上屋と下屋を接続する繋ぎ梁は用いていない。地面から下屋の桁までの高さは低い部分で6尺である。木造を基本としているが、上屋梁の一部や下屋の桁の一部が石積みの壁の上ののりなど、石造とも解釈できる構造の一部を含んでいる。

こうした木造の一部に石造を含む石室は、どのように過程を経て形づくられてきたのか。古い時代の石室は梁間2間ほどの規模であったことが指摘されている(奥矢恵・大場修「富士山の吉田口登山道における山小屋建築の成立過程とその形態」(『日本建築学会計画系論文集』、第82巻第739号、pp.2383-2392、2017年)などを参照)。この規模の梁間であれば、旧来の石室は上屋のみからなる単純な建築であった可能性が高い。この場合には、石室の構造の原形として木造と石造の双方が想定される。勿論、一つの発展の方向性には、当初から木造として発達してきた過程も想定されるが、わらじ館の建築が木造の一部に石造を含むこと、さらには江戸後期の石室(富士室)を描写した『富岳雪譜』(享和3(1803)年)に「三方二石ヲツミー一方ヲ出入口トシテ上二梁ヲハタシ板ヲナラベ其上二砂石ヲ累積」とあることから、ここではもう一つの発展の方向性として、石造を出発点とした過程を想定したい。上屋のみからなる石造の建築を出発点とした場合、後に形を整え、規模を拡大させるなかで、上屋の両側に下屋を発達させた過程が想定される。その際、木造を基本として上屋をつくり、下屋を石造とすることも可能であるし、前面の下屋については登山道との関係から開放性を目指して木造とすることも可能である。

近代登山の普及の舞台となった日本アルプスでも、木材の調達が困難な高所において、石積みの壁の上に梁、桁をのせ、小屋組を組んだ石室の遺構が散見される。これらのうち、槍ヶ岳や穂高連峰へといたる登山道沿いにのこる石室の遺構を調査した結果、これらはどれも斜面を切土して設けた石積みの壁の上に梁間15尺ほどの屋根を架けた、石造とも解釈できる構造であった。こうした石造の山岳建築は、とくに高所において木造の山岳建築に先行して登山者の休泊場所に利用されており、そして、近代登山の普及を背景に施設の大規模化がはかれると、結果的に木造へと移行していった。同様の過程は、近代登山の普及以前から開かれていた富士山においても想定されよう。当初は石造でつくられていたものが、信仰の拡大とそれにとまなう登拝者の増加によって施設の大規模化がはかれ、木造へといたる変化がおこった可能性がある。さらにその先には、近代登山の影響も受けながらより多くの登拝者を受け入れるべく、木造を主体とした建築の普及と施設の拡大がおこったと考えられるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 梅干野成央	4. 巻 99 (1159)
2. 論文標題 日本の山小屋 - 建築史の観点から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 建築と社会	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大野宏輔・梅干野成央
2. 発表標題 槍ヶ岳・穂高連峰に至る登山道における石材を用いた山岳建築に関する構法とその分類
3. 学会等名 日本建築学会北陸支部研究報告会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大野宏輔・梅干野成央
2. 発表標題 槍ヶ岳・穂高連峰に至る登山道における石材を用いた山岳建築に関する構法とその変遷
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梅干野成央・山本亮太
2. 発表標題 富士山における石室の構法 - 御殿場口登山道「わらじ館」の建物調査にもとづく復原的考察 -
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本亮太・梅干野成央
2. 発表標題 北アルプスの石室遺構とその構法
3. 学会等名 日本建築学会大会学術講演会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梅干野成央・山本亮太
2. 発表標題 御嶽山における山小屋の建築とその形成過程
3. 学会等名 日本建築学会北陸支部研究報告会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本亮太・梅干野成央
2. 発表標題 富士山登山道における山岳建築の分布とその構成
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考